ブロッコリーの栽培面積拡大が続く四国産地の取組

～ＪＡによる作業請負と有利販売による生産支援～

上田　直人(東三河農林水産事務所農業改良普及課)

【平成２９年６月２９日掲載】

【要約】

香川県と徳島県の産地においてブロッコリーの栽培面積が拡大している要因は、①新規参入者や高齢者でも栽培しやすい、は種、育苗、定植などの作業受委託の仕組みや、②市場までの距離が遠くても鮮度が保持できる､氷詰めと冷蔵保存による有利販売の取組など、産地が地域の状況に応じた支援体制を構築していることであった。

１　はじめに

ブロッコリーは、ビタミンＣが豊富に含まれる健康野菜として人気があり、洋食化の進展に伴い需要が伸びている。愛知県は、東三河地域を中心とした冬春ブロッコリーの主要産地であり、長年全国第２位の栽培面積（平成27年度、970ha）を誇っている。市場からは、需要拡大に十分応えるため、生産量の一層の拡大や長期安定出荷が望まれている。

このような中、近年、ブロッコリー生産が急速に拡大している四国地方の香川県と徳島県は、平成27年度の栽培面積が平成20年度比で、それぞれ174％（981ha)、164％（722ha）となっている。そこで、東三河地域のブロッコリー産地の参考にするため、四国産地のＪＡの取組を調査した。

２　栽培面積拡大にむけた各地域の取組

(1)　香川県綾坂地域

ア　地域の概要

綾坂地区は香川県瀬戸内側の綾川町、坂出市、宇多津町からなり、綾歌南部、府中、坂出園芸の３つのブロッコリー部会がある。栽培面積の合計は283ha、栽培者は209人である。新規就農やレタスからの品目転換により、平成20年と比べて面積は約3.2倍に増えている｡主に水田において水稲やスイートコーンなどと輪作で栽培されており、京浜方面の市場に多く出荷されている。

イ　ＪＡの取組

(ｱ)　は種と育苗作業の受託

香川県内には８箇所にＪＡの育苗センターがあり、その１つである綾歌南部広域育苗センターでは27haの栽培面積に相当する育苗を農家から請け負っている。愛知県内では128穴セルトレイが一般的だが、香川県では省力化やコスト削減のために200穴と220穴セルトレイを使用している。香川県は農業法人の参入が進んでおり、200穴は、農業法人が雇用労力を活用した手植えを行うために、220穴は、全自動定植機を使うために利用されている。

(ｲ)　定植作業の受託

ＪＡ綾坂府中集出荷場では、ＪＡ職員が定植作業を請け負っている。定植機は、みのる製全自動定植機（写真１)が綾歌南部と府中に２台、坂出園芸に３台ある。作業料金は10aあたり10,000円であり、高齢栽培者のほとんどが利用している。

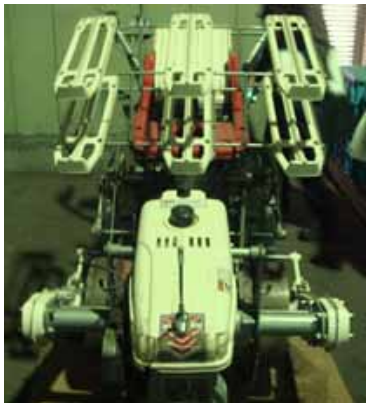

写真１　全自動定植機
（みのる産業株式会社製）

(ｳ)　氷詰め出荷と作業の省力化

ＪＡ綾府中集出荷場では、栽培者がコンテナ出荷し、ＪＡ職員が選別、箱詰め、氷詰めを行っている。氷詰めの方法は、ダンボール内側を防水フィルムで被い、吸水シートを底に敷いてからブロッコリーを詰め、その上から氷を投入している(写真２)。

また、花蕾サイズを判断するためのプラスチック製の出荷規格目安板を栽培者全員に配付しており、新規栽培者でも容易に部会の出荷規格を判断できるようにしている（写真３)。

写真２　氷詰めされたブロッコリー

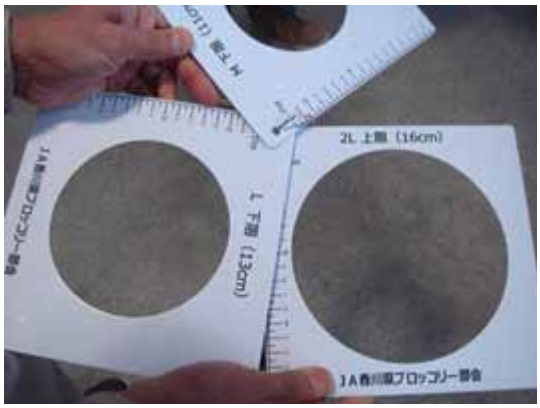

写真３　出荷規格目安板

(2)　徳島県阿波町

ア　地域の概要

阿波町は徳島県北東部の吉野川沿いにある。ＪＡ阿波町ブロッコリー部会は栽培者285名、栽培面積は157haである。新規就農やホウレンソウからの品目転換により、平成20年度から比較すると、栽培面積は約４倍に、栽培者数は約２倍に増加している。主に水田において水稲の裏作などで栽培されており、京阪神の市場に多く出荷されている。

ＪＡ阿波町は市や県の補助事業を積極的に活用し、全自動製氷機(写真４)、全自動定植機、テープ貼封函機、畝立て機、冷蔵庫を導入している。全自動定植機は栽培者に貸し出している。

イ　ＪＡの取組

(ｱ)　は種、育苗

ＪＡ阿波町も、は種、育苗作業を請け負っており、ほとんどの栽培者が苗生産を委託している。セルトレイは128穴を使用しており、セルトレイ成型苗１枚の値段

は1,020円(税抜)である(写真５)。育苗ステージや苗の生育状況に応じて、手かん水とスプリンクラーを使い分けてかん水を行い、良苗を生産している。

(ｲ)氷詰め出荷と冷蔵保管

ＪＡ阿波町は徳島県内でいち早く氷詰め出荷を開始した。香川県と同様の方法で氷詰めし、氷詰め後に冷蔵庫で保管し、市場の値動きを見ながら出荷量を調整している。

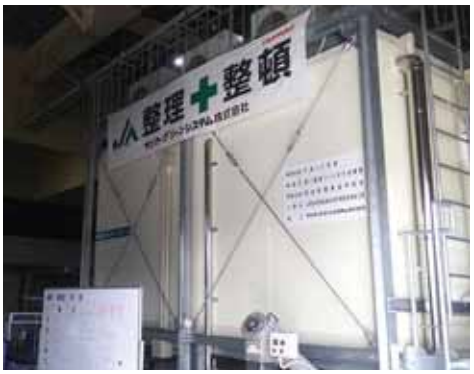

写真４　全自動製氷機

写真５　ＪＡの育苗ハウスの様子

３　まとめ

今回ＪＡの調査を行った結果、香川県綾坂地域と徳島県阿波町においてブロッコリーの栽培面積が拡大した要因として以下の点があげられる。

１つ目は、は種、育苗、定植の作業の請け負いにより、新規参入者や高齢者でも栽培しやすいことである。両産地の栽培者は育苗ハウスを所有する必要がなく、新規参入者がブロッコリー経営を始める際に、経費を抑えることができ、栽培を開始しやすい。また、栽培者はＪＡに定植作業を依頼すれば定植後の管理と収穫作業に集中できるため、高齢の栽培者でもブロッコリー経営を維持できる。

２つ目は、氷詰め出荷と冷蔵保存により、市場や消費地まで遠いという弱みを克服し、有利販売をしていることである。氷詰め出荷は鮮度保持技術として市場からの評価が高く、高単価で取引される。また、長期間品質保持ができるため、市場情勢を見て出荷することが可能である。経費の負担は大きいものの、他産地との差別化を図る手段として非常に効果的である。

いずれの産地も、担い手の高齢化や市場との距離など、産地の弱みを克服するための取組が実施されていた。

東三河地域では、以上のような取組を行う産地と競う手段を探ることが重要である。当地域では、現在、厳寒期の安定出荷技術の開発、鮮度保持対策の検討、栄養成分の把握などを進めており、生産量の一層の拡大や長期安定出荷に向けて、生産者及び関係機関が一丸となって取り組むべきと考える。

Copyright (C) 2017, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.